



ジョナサン・ノット×岩下眞好 対談

Symphony Lounge

[シンフォニー・ラウンジ]

Jonathan Nott

Masayoshi Iwashita

取材・文／岩下眞好 音楽評論家

interview&text by Masayoshi Iwashita

# 《運命》を演奏したくてたまらない — ジョナサン・ノット

— 7月は二つのプログラムを指揮されます。それぞれ選曲に特徴のあるプログラムですね。  
ノット:ある程度ひとつのまとまりがあると  
言えます。オペラシティシリーズ〔7月11日〕  
は、ドビュッシーの《映像》という、香り高い  
フランスの音詩で締めくくられます。いっぽ  
う、定期演奏会〔7月16、18日〕は、ベートー  
ヴェンの第5番というドイツの名作交響曲  
で結ばれます。その点ではフランスの芸術  
とドイツの芸術との違いを示す対照的なプ  
ログラムです。後者は強靱なリズムに支配  
される明快で構築的な音楽によるプログラ  
ム。前者は、舞曲的な要素もありはします  
が<sup>注1)</sup>、ほとんど非リズム的な音楽によるプ  
ログラムだとも言えましょう。

— 細川の《循環する海》に始まりラヴェル  
とドビュッシー……。  
ノット:すべてが波のように揺らぎ流れる。  
— 水のイメージ。キーワードは流動性で  
しょうか。  
ノット:これに対して次のコンサートでは、地  
面というかコンクリートというか、つまりしっ  
かりと押さえて掴むことのできるようなもの  
を相手にします。この二つのプログラムで、  
ごく短い期間のうちに音楽がもつ大きな幅  
をオーケストラも私も体験したいのです。  
— 私たち聴衆にとっても、とても興味深  
い体験です。音楽監督としてのノットさんの  
ポリシーと言えますね。  
ノット:「音」を充実させてゆくことを目指し

ている私たちはドイツ系レパートリーに取り組んで成果を上げることができました。でも同時に別の要素も無視できません。「音」の柔軟性や官能性、イマジネーションの大胆さといったことです。

——フランス的な要素ですね。いっぽうのベートーヴェンのほうのプログラムは、リズムが大きなテーマでした。

ノット：リズムという観点はバルトークについても当てはまります。この面では、バルトークの場合には、メトロノームの指定とリズム的に適切な演奏をすることとのあいだで私は決断しなければなりません。それは時間とのゲームです。リズムとのゲーム、あるいは切迫するものとの、また強制とのゲームにもなります。

——強制と言いますと？

ノット：たとえばマーラーの作品でのマーチを思い出してみてください。規則正しいリズムで行進してゆくとき、それに嬉々として積極的に乗って進む場合もあれば、強制されて行進することもありうる。ポジティブな自己表現としての主体的で自由なリズムと囚われの身の強制されたリズムとがあるのです。こうしたリズムとのゲーム、戯れがとても面白い。バルトークの協奏曲でのリズムは、ドビュッシーやラヴェルにおける香りに相当するような重要な意味をもっています。

——バルトークのピアノ協奏曲第1番は、前衛的であると同時に、民族的なものを基盤にもっています。この二つの方向は、実際に作品のなかでどのような現れ方をしているのかという点から、この作品の特質をお話いただけますでしょうか。

ノット：両端の楽章は厳しく密度の高い音楽で、多数の舞踏的な要素を取り扱おうと

しています。中間の第2楽章も厳しい音楽であることには変わりはありませんが、より香りがあるというか、「音」への志向が認められます。バルトークにあっては民族的なものとは東欧の民族音楽であるわけですが、それがもつ東欧的な美は、西欧の趣味からすれば奇抜で異端的です。自由奔放な音楽。でもその内側に、こうした風変わりなリズムや音階と西欧の音楽原理とのあいだの緊張をはらんでいます。

——そして西欧音楽と比べて、とても硬質でたくましい……。

ノット：とても硬質でたくましく、とても荒々しい。そうした素材を、バルトークは彼自身の音楽言語に移しかえたのです。作曲にあたって、そもそもリズムとは何か、またどのようにしてリズムの複合体をつくることができるのかといったことを彼は考え尽くしました。「ダダダダーン」という運命の主題をベートーヴェンが練り上げたときと全く同様でした。リズムの造形美は知的な要素だと思います。規則性との戯れと不規則性との戯れ。心臓の鼓動から踊りまで……。ここに音楽がもつ力を見い出しています。

——この日は、続いてベートーヴェンの交響曲第5番です。リズムに注目されていますが、また作品の現代性にも……。

ノット：現代性ということならまず、四つの音からなる単純な構成要素<sup>注2)</sup>が礎石となり、それが極限にいたるまで追及されていること、またそれが多様に用いられていることが挙げられるでしょう。偉大な作曲家は素材を最大限に運用する能力に長けているものですが、ベートーヴェンはまさにそうです。この曲の第1楽章については、リズム的な要素にばかりではなく、冒頭の四音

の動機が直後に半音下げて繰り返されているということにも注目すべきです。直後に半音下がることによって生じる緊迫感が簡明で的確なリズムと見事に結び合っています。そればかりか、これが楽章末で絶大な緊張を生んでいる。第3楽章も、トロンボーンが加わる第4楽章も、いずれも鮮やかな対比性に満ちていて、ベートーヴェンの冒険は大胆さの極致に達しています。

——第4楽章で3本のトロンボーンはじめピッコロ、コントラ・ファゴットが加わり勝利感を際立たせますが、これらの楽器を交響曲で用いたことも新機軸であり、ベートーヴェンの冒険、その現代性と言えますね。

ノット:もちろんそうです。《エロイカ》ではベートーヴェンは、それまでは2本だったホルンを3本に増やしています。オーケストラの革新にも強い意欲と関心をもっていたのです。第5交響曲は、終楽章に向かって一滴の水が巨大な大波になるように発展してゆき、最後に管楽器も総動員されて沸騰して頂点に達する。高熱・高密度な状態で宇宙を誕生させたビッグバンの大爆発に似たイメージ……。多様な可能性をはらんだ作品です。この緊張に満ちた作品を指揮することは、つねにひとつの挑戦です。演奏したくてたまらない。なによりも私はこの作品のファンなのです。

——作品への興味が尽きない……。

ノット:第5交響曲の礎石は簡潔な四音ですが、この礎石の上に築かれてゆく音の連鎖は、凝り固まったものではなく流体のように柔軟で流動的です。ベートーヴェンの音楽は、この連鎖を構成する断片的な小さな時間経過のなかに時間芸術としての音楽のエッセンスが集約されている。経

験を重ねるうちに私は、音楽という芸術には、この微小な時間を繊細につないでゆく感性が重要なのだと考えるようになりました。私の仕事は、最初の音から最後の音まで、時間のなかで起こる出来事を、建築家のように各部分に手厚く目配りしながら緊張感豊かに聴衆の皆さんに物語ることなのです。

——聴きどころ満載の演奏になりそうですね。今から楽しみです。ところで、この日の最初にはストラヴィンスキーの《管楽器のための交響曲》が置かれています。単一楽章の短い曲ですが管楽器の響き合いの妙を味わえる作品です。面白いことに6月の定期演奏会の曲目だったR. シュトラウスの《23の弦楽器のためのメタモルフォーゼン》と対をなしていますね。

ノット:それは考えていました。でも、ちょっと待ってください(と、スコアを取り出して、楽器の数を数えはじめる)。ああ、やはりそうだ。このストラヴィンスキーの曲も今回演奏する改訂版は、ちょうど23の管楽器という編成です。とてもよい組み合わせになりました。(2015年6月、都内にて)

#### <前半の対談を終えて>

ベートーヴェンに関連しては古楽奏法や楽譜のことなども話題にしたが、色合いや表情の表出のためにはヴァイオリン・パートの右手の使い方を重視するというマエストロの発言が印象的だった(後半の対談は『Symphony』8/9月号に掲載されます)。

1) たとえば《映像》は、スペインのものももとより、イギリス起源の舞曲ジグのリズムなども用いている。

2) 第1楽章冒頭のいわゆる「運命の動機」を指している。